

## 大阪梅田キャンパス講座

### <阪神経済史研究の新潮流>

#### 鉄道史からみた近代大阪の発展

##### ○講師プロフィール

谷内 正往 (たにうち まさゆき)

大阪商業大学総合経営学部准教授

近畿大学大学院博士後期課程満期退学、商学博士。

著書に、『戦前大阪の鉄道とデパート』東方出版、2014年(鉄道史学会第6回住田奨励賞受賞)。

『戦前大阪の鉄道駅小売事業』五紘舎、2017年。加藤諭と共著『日本の百貨店史』日本経済評論社、2018年、「阪神デパ地下の源流(上・中・下)」『大阪春秋』第173-175号、2019年2・6・9月など。

##### ○講義概要

近代大阪に関する研究は多数あるが、本講義では鉄道史から大阪のあり方を考えてみたい。第1に戦前の市電(チンチン電車)の敷設である。川中心の「よこ」の交通移動から、鉄道による「たて」の交通移動を生み出し、そのおかげで、キタ、ミナミの繁華街が生まれるキッカケをつくった。第2に、市内と郊外を結ぶ鉄道(私鉄)が、兼業によって電灯電力、宅地開発、遊園地、歌劇、百貨店などの事業を行い沿線の乗降客を増やし、新しい生活文化を生み出したことである。第3に、工業都市大阪の貨物輸送の一端を鉄道が担っていたことである。例えば、西成鉄道(現、JR環状線、ゆめ咲線)は、貨物輸送と工場通勤のための電車でもあった。途中の野田駅には中央卸売市場への引き込み線が敷かれていた。

##### ○参考文献等

- ・谷内正往「大阪の交通史―戦前の市電と乗合自動車(バス)」『都市と公共交通』第42号、大阪公共交通研究所、2018年6月。
- ・同 「大阪になぜ「南海百貨店」がないのか」『大阪商業大学商業史博物館紀要』第19号、2018年12月。
- ・同 「大阪の鉄道と地下街」井田泰人編著『鉄道と商業』晃洋書房、2019年。

\*\*\*\*\*

#### 貿易史からみた近代神戸の発展

##### ○講師プロフィール

木山 実 (きやまみのる)

関西学院大学商学部教授。専門は日本経営史、特に戦前期貿易商社の研究。京都市出身。同志社大学大学院商学研究科博士後期課程中途退学、博士(経済学)。愛知大学経済学部専任講師を経て、2001年に関西学院大学商学部専任講師。その後、准教授を経て現在に至る。

##### ○講義概要

大正期から昭和初期にかけての時期は阪神地域がもっとも活気に満ちあふれていた時期といえる。短期間ながら大阪市の人口は東京市の人口を凌駕して「大・大阪」時代と呼ばれ、神戸は大正期の大戦景気の波に乗って貿易額でそれまで首位だった横浜を抜いて日本一の「港都」となった。大阪、神戸を中心としてその周辺地域には阪神間モダニズムの波が押し寄せてきた時期でもある。

大阪を鉄道史という切り口でみた1回目の講義に続いて、2回目となる本講義では、神戸を貿易史という切り口でその発展過程をたどってみたい。神戸といえばハイカラな港町というイメージを持たれることが多いが、それが「港都」になる過程ではハイカラとは正反対の影の部分が多分に帯びていたことが明らかになる。

## ○参考文献等

木山 実『近代日本と三井物産—総合商社の起源—』ミネルヴァ書房、2009年。  
大森一宏・大島久幸・木山実編『総合商社の歴史』関西学院大学出版会、2011年(2018年に第5版で若干改訂)。